地研ニューズレター
―地域連携センターニュース―

ISSN 1882-4218

目次

◇地域連携センター長あいさつ……1
◇青森まるっとよいどころ祭り……2
◇公立はこだて未来大学交流事業……3
◇受託事業・受託研究……4
◇地域連携センタープロジェクト事業……6
◇公開講座……10
◇創業・起業セミナー……12
◇青森市学生ビジネスアイデアコンテスト……12

地域連携センター長あいさつ

開学 30 周年を迎え　地域と共に

青森公立大学が「知のプラットフォーム」として、青森県全域に対し地域貢献していくために何が重要か。「大学の地域貢献における使命」を自覚しつつ、地域社会の変化、時代の変化を理解しながら、新たな試みを模索していくことではないかと思っております。

「大学の地域貢献における使命」については、2018 年から「地域連携センター」として組織再編した際に「本学の地域貢献は、『地域に開かれた大学』、『草の根大学』として『経営経済学という知』を基礎としながら『地域の活力を促進すること』であると定めております。「研究」「教育」「コンサルテーション」「インキュベーション」を「4 本柱」と称して「センターの事業領域」とし、自主研究、受託研究、社会人向けの人材育成や各種セミナー、ゼミ活動のフィールドワーク、地域イベントの開催、他大学との交流事業など様々な事業を実施してきました。長年継続して行われている事業もあり、また毎年自治体、企業の方々からのご要望により、新たな事業も展開されています。我々が改めて自覚しなければならないことは、どの事業も地域の方々と共に考え、取り組み、その成果として、学生や社会人の「共育」、研究や地域課題の解決に向けた「共創」ができていることです。

本学は、2023 年に開学 30 周年を迎えました。「地域と共にある大学」として、常に地域貢献の使命と現実を問いながら、地道に「継続と挑戦」に取り組んで参りたいと思います。

地域連携センター長
生田　泰亮

青森まるっとよいどころ祭り

本事業は、青森公立大学が主催する地域 PR イベントです。地域連携協定を締結する自治体をはじめ、その他の県内団体様から出展協力を得て開催し、地域産品の PR など地域活性化へ向けた貢献を大学が主体的に果たすとともに、学生が地域経済の現場で実践的に学び、青森地域への関心を高め、将来の青森地域を担うことができるよう人材の育成を目指します。

開学 30 周年を迎えた 2023 年度は“まちなか“ではなく本学キャンパスで大学祭と同時開催するという初めての試みとなりました。青森まるっとよいどころ祭りを見たことのない学生などの若年層、大学祭に来ることのない一般市民がお互いのイベントを知る良い機会となり、大学祭と合わせ約1,200人の方にご来場いただきました。

ご来場いただいた皆様、ご参加いただいた団体の皆様に感謝申し上げます。

2024 年度も開催する予定となっていますので、多数の皆様のご来場をお待ちしています。

開　　催　　日：2023 年 10 月 7 日（土）、8 日（日）
参　加　団　体：鰺ヶ沢町、今別町、おいらせ町、大間町、風間浦村、佐井村、七戸町、外ヶ浜町、田子町、中泊町、西目屋村、蓬田村（12 町村）
出展ブース参加：青森県国スポ・障スポ局、ラインメール青森 FC

会場の様子

中泊町　活しじみすくい取り

おいらせ町　食パン「もち姫のキセキ」

蓬田村　ブース

たくさんの方にご来場いただきました！

運営した学生スタッフ

公立はこだて未来大学交流事業

写真①　本学神山博学長との歓談（青森公立大学にて）

写真②　学生間の意見交換（青森公立大学にて）

写真③　両大学の学生･教員の交流（青森公立大学にて）

2023年度の本学と公立はこだて未来大学との交流事業のテーマは北海道・北東北の縄文遺跡群を通した地域貢献です。

2023年10月24～25日に公立はこだて未来大学の吉田博則准教授、学生3名が本学を訪問しました。本学の神山博学長と歓談をした後（写真①）、国際芸術センター青森の建物を視察しました。その後、本学の三浦英樹教授と長岡朋人准教授、学生18名が交流しました。

10月24日には本学の研究の進捗を報告し、共同事業における方針と今後の展開を議論しました。長岡准教授がプロジェクトの紹介と進捗を話し、ゼミの学生18名による研究成果の発表会を行いました。18名の2時間以上にわたる発表では公立はこだて未来大学の皆様から質問や有意義なアドバイスが寄せられました。その後、7人ずつ3グループに分かれて、学生による意見交換や交流会を行い、会場が和やかな雰囲気になりました（写真②、③）。翌25日、小牧野遺跡や三内丸山遺跡の見学では、遺構、復元された建物、遺跡の立地環境を見ました。実際の遺跡を見ることで、縄文時代の遺跡の成り立ちや建築に関する意見交換を行いました（写真④）。

次に、2023年12月11日に本学の長岡准教授と学生6名が公立はこだて未来大学の訪問を行いました。公立はこだて未来大学のプロジェクト研究を視察し、APU（青森公立大学）× FUN（公立はこだて未来大学）のブラインドアートで歓迎を受けました（写真⑤）。本学との学際的な接点のもとで交流事業に関する意見交換を行いました。公立はこだて未来大学では吉田准教授のゼミ学生が進めている、対話型AIによる説明書の生成、不定形素材に機能を付け加えたプロダクトの制作、家具デザインの発想支援、3Dモデルを用いた規矩術の習得支援、端切れを用いたモザイクアート、組みひも型デバイスの作成に関する研究発表を拝聴し、共同研究の可能性を熱く議論しました。研究会には公立はこだて未来大学の鈴木恵二学長がいらっしゃって歓談をしました（写真⑥）。

昨年度から継続している交流事業の成果として、地理情報システム（GIS）を用いて遺跡の立地と災害のリスクの評価を行うことで、想定外の災害に備える新知見を得ることができました。一方､公立はこだて未来大学に訪問したときにアートと建築に関わる研究発表を拝聴し、本学が進めている研究との接点を探りながら、共同研究のアイディアを出し合いました。

地域連携センター　兼任研究員　長岡　朋人

写真④　三内丸山遺跡の見学

写真⑤　ブラインドアートでの歓迎（公立はこだて未来大学にて）

写真⑥　公立はこだて未来大学鈴木恵二学長との懇談（公立はこだて未来大学にて）

受託研究・受託事業

情報基礎科目におけるナレローの効果測定およびレビュー
～スキル定着効果を高める指導と試行錯誤抑制効果の検討～

本学では上級年次での学習に欠かせない内容を扱う科目として「情報リテラシーⅠ」を開講し、PC 操作については MS-Office 実習教材「ナレロー」を課すことでスキルの底上げに成功してきている。

ナレローが実装するコンピューター適応型テスト（CAT）では、項目応答理論に基づき、受験者の能力に合わせた難易度の問題を能力値が収束するまで出題するので、試験問題数と試験時間は、受験者のスキル習熟度によって異なる。

操作スキル習得では、まず資料を使って解き方を学習し、その後課題で練習することを推奨しているが、それをせずにメニューを探し回る学習者が一定数存在する。そうした学習者は正解に至るまでに時間がかかってしまうことに加えて、正しい操作知識が身につかないので、次に同じ問題を解答する際にも同様の試行錯誤を繰り返す傾向が強く、概して能力値が高くなりにくい。

本研究では「資料を見ずに」「短時間に」正解できるスキルが身につくことを目標とし、操作スキルの底上げをしつつ、試行錯誤を抑制する方法を検討した。具体的には学習方法改善の指導をこまめにおこなうと同時に、CAT の最大試験時間を制限することで試行錯誤しにくい試験環境を構築した。

一連の CAT を行った結果、最後までスキル未熟のままの学習者は、試験時間を 90 分の限度まで設定しても能力値が上がらないこと、一方充分に習熟した学生は短い試験時間で高い能力値に収束することが示された。また学期開始当初に試行錯誤を繰り返していた学習者は学期末には減り、知識を得てから問題に取り組む学習者が増えたことから、全体的に試行錯誤を抑制できたと評価された。また今回の手法では CAT 測定能力平均値の低下が懸念されたが、試験時間を制限しない場合と同程度の成績向上が学期末に得られたことから、低下への影響はないと結論された。

地域連携センター　兼任研究員　神山　博

青森市浪岡地区におけるコミュニティバスに関する調査

本事業は、「浪岡地区コミュニティビジネス創出業務」として、青森市からの委託により行なったものである。青森市による「市民意識調査」（2022（令和 4）年）によれば、青森市浪岡地区の住民は「住みにくさの理由」の第 2 位に「バスや鉄道が利用しづらく通勤・通学に不便」を挙げており、その回答率は市全体を上回っている。地区内のバス交通には市バス、民間の路線バスのほかに、地区内のみの路線バスであるコミュニティバスがある。コミュニティバスは青森市浪岡振興部が所管し、民間事業者が運行しているが、便数の少なさ、利用者数の低迷、経費の増大といった問題を抱えている。まず乗降客数調査により利用者数を確認した。さらに地区内全戸配布のアンケート調査によりバス交通に対する住民の意識を明らかにした。その結果、上記の問題点を住民が認識しているほか、地方都市で導入が増えつつある「デマンドバス」を要望する声があることがわかった。そこで青森県および北海道の 3 市町で、デマンドバスの先進事例視察および行政担当者へのヒアリングを行った。これらの結果をふまえ、浪岡地区に適したデマンドバスの方式を示した。各調査の結果は、浪岡地区住民の参加によるフォーラムで学生により報告された。

地域連携センター 兼任研究員　足達　健夫

札幌市手稲区のデマンドバス「チョイソコていね」視察

「浪岡地域交通フォーラム」での調査結果報告

令和５年度あおもり共創ビジネスプログラム

JR東日本青森商業開発様での
ワークショップ

JR東日本青森商業開発様からの成果報告

山神様からの成果報告

本プログラムは、青森県主催、本学、弘前大学、八戸学院大学が共同運営するプログラムです。県内企業と大学等が、新たなビジネスや新商品の企画に取り組み、その成果を普及させることで、県内での新たなビジネスの創出を図ることを目的とするものです。９月に応募のあった株式会社JR東日本青森商業開発様と株式会社山神様を訪問し、企画内容やご要望等を受け、参加学生を募集、10月から２社２チームで取り組みました。

JR東日本青森商業開発様とは「青森駅新ビルの開業イベントと情報発信コンテンツの企画」というテーマで、６名の学生が参加しました。新ビル開業に向けた取り組みに対して、学生から様々なアイデアや調査結果をプレゼンし、「実現可能性を問う」をキーワードに、毎回積極的なディスカッションとなりました。山神様では「ホタテの貝殻を活用した新商品の企画」をテーマとし、４名の学生がホタテの貝殻焼成カルシウムの既存商品の調査、貝殻焼成カルシウムの特性を活かした商品開発の提案、試作品の実験などに取り組みました。本プログラムは、参加学生が、会社や事業、仕事について学び、学生らしい視点や着想で企画を考えるという面もあり、県内での「新たなビジネスの創出」に貢献するとともに、人材育成の面でも良い試みだったと思います。貴重な機会を与えてくださり、ご協力いただきました関係者の方々に感謝申し上げます。

地域連携センター　兼任研究員
生田　泰亮

No	強力粉	薄力粉	塩	炭酸カル	酸化カル	水	PH	こねる時間	水和	幅・厚さ	茹で時間	感想
1	250g	250g	5g	5g		220cc	8	15分	30分	1・細	2分	見た目は中太縮れ麺
2	250g	250g	5g		5g	220cc	11	20分	30分	5・細	2分	麺が黄色っぽい。長さは多少あり。
3	250g		2g	2g		100cc	11	15分	30分	7・細	2分40秒	そうめんっぽい食感・見た目
4	250g		2g		2g	100cc	11	30分	30分	1・細	2分	麺がちぎれやすかった。湯で時間が短かった。
5	160g	80g	3g	3g		100cc	9	20分	30分	1・細	2分	食感や見た目はそうめん。麺は少し硬め。
6	250g		2g	1.5g	0.5g	100cc	12	20分	45分	0〜3・細	2分	すぐちぎれる。他の麺より乾燥しやすい。
7	188g	84g	2g	1.5g	0.5g	100cc	12	15分	45分	1・細	2分	麺が白っぽい。長さあり。
8	250g		2g	5g		150cc	8	12分	約2時間	0・太	2分	長さはちょうどよかった。
9	250g	250g	5g			230cc		10分	20分	1・太	2分	※パスタ麺　こね時間が短くてもまとまりやすい
10	250g	250g	5g	5g		220cc	8	15分	30分	1・太	2分	No.1と同じ分量だが、太麺のほうが長さが出やすい。
11	140g	70g	3g	3g	3g	約100cc	13	7分	3時間	1・細	2分	長さなどは十分。見た目はそうめん。

考察
・生地を作る際、炭酸Caを混ぜた時より、水酸化Caを混ぜたほうが黄色い麺ができる。
・水酸化Caを混ぜた時は、すばやく混ぜなければ、乾燥して麺の状態にするのが難しい。
・ラーメンにするにはかん水に炭酸Caを混ぜたほうが麺の状態にしやすい。水酸化 Caは麺の発色の役割がある。
・水和時間を長くしたほうが、生地がまとまりやすく、麺がちぎれることもない。
・水酸化Caを混ぜた生地の時は、薄くのばしすぎると切れる確率が高かった。
・こねる時間は一定にするよりも、生地の状態を見て決定したほうがよい。こねる時間が長すぎると、水和が始まってしまい、乾燥しやすくなる。
・生地を切る際、打ち粉を多くしないと麺同士がくっついてしまう。
・今回の実験で、強力粉と水酸化 Caの相性は悪いということを経験付けることができた。

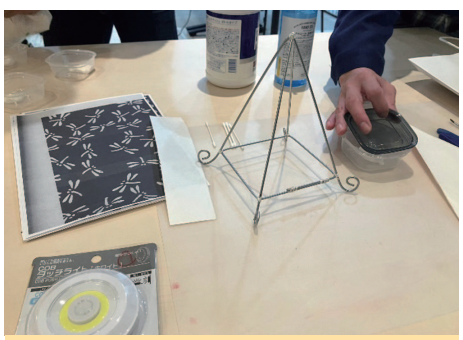
貝殻焼成カルシウムを利用した商品開発実験の結果

学生によるアオモリワーケーション体験・交流プログラム企画・運営業務

本報告は2023年度、青森市による「学生によるアオモリワーケーション体験・交流プログラム企画・運営業務委託」の成果である。このプロジェクトは学生の企画をワーケーションに取り入れることで、人材交流、地域活性化、学生の成長などにつなげることを目的としている。青森公立大学佐々木研究室では、学生が中心となって青森市の「ねぶたを中心とした津軽文化体験」プログラムを企画した。体験プログラムの実証実験は10月28日、29日の２日間行われ、実際に青森市にワーケーションに来ている方々が体験した。プログラムとしては、ねぶたの家ワ・ラッセでのねぶた解説、ねぶた囃子体験、津軽びいどろの工場見学、青森の食文化体験、ねぶた師の指導によるねぶた de ライトの制作体験などが行われた。その成果は令和５年度青森圏域連携中枢都市圏市町村長会議および、AOMORI SIX 合同学修研究発表会にて報告を行った。体験者からは「青森ならではの体験ができた」「ねぶた師の解説が面白かった」、また学生からは「青森を満喫してもらうために創意工夫をすることができた」「ねぶたには一つ一つストーリーがあった」などの感想が聞かれた。これらのことから人材交流、地域活性化、学生の成長など、本プロジェクトの目標をすべて達成できたと思われる。

地域連携センター　兼任研究員　佐々木　てる

ねぶたの家　ワ・ラッセ　ねぶた解説



ねぶた de ライト　制作

地域連携センタープロジェクト事業
（公益財団法人青森学術文化振興財団助成事業）

ポスト・コロナにおける地域イノベーション創発モデルの展開：コミュニティ MICE のプロトタイプ型実践研究

イノベーションの学術的研究には、セレンディピティからのアプローチがある。セレンディピティとは、一般的に「思いもよらなかった偶然がもたらす幸運」という意味である。偶然の出来事や出会いに、なんらかの意味や意義を見出し、新商品開発や新サービス、制度改革につなげていくことがある。また、不確実性の高い現代社会において、事業の成果を上げていくためには、因果関係から分析的に考えるだけではなく、手元の資源や人材、ネットワークを活かし、不確実な将来をできるだけコントロールする、つまり実効性を創造的に高めていくことが必要になる。すなわち、エフェクチュエーション理論（サラス・サラスバシー）のアプローチが参考になる。今年度の研究プロジェクトにおいては、このアプローチを取り入れ、等身大の取り組みを始めるところからスタートしている。大鰐町 カフェ＆バー From O 創業・起業家の皆さんと 学生との交流も、その観点からのものである。（写真①②）

写真①　大鰐町 カフェ＆バー　From O、創業・起業家の皆さんと 学生との交流談

写真②　大鰐町 From O、フィリピン Roger 氏との青森の魅力発信交流バーチャル・Community MICE

写真③　フィリピン・セブノーマル大学との学生・教員対面・オンラインワークショップ（12月1日）

4月以降、フィリピン・マニラの 友人 Roger 氏に依頼し、一緒に取り組みを進めてきた。また、セブノーマル大学、Dr. Tizza 氏，Mr. Navarro 氏は、11月下旬に、直接青森公立大学を訪問し、帰国後セブの方々に青森の魅力を伝えてくれた。同大学 Dr.Genara 氏もこの時、Zoom でのハイブリッド型ワークショップに参加、ソーシャルビジネスモデルの具体的な実装について、同僚の先生方と多方面から実践的な報告を行って下さった。（写真③）12 月には、遠藤が、セブノーマル大学を訪問し、新学長（Dr. Daniel Ariaso 氏）始め多くの幹部教員と意見交換し、地域経営調査を実施した。そして、青森の魅力を多くの方々に知っていただく活動を行い、任意の継続的な交流を約束してきた。昨年までは、インバウンド国際観光振興のためのコーチング・フィールドワーク型英語学習モデルに力点を置いていたが、今年度の秋には、セブノーマル大学の経営事業戦略に組み込み、連携ができるようになったことで、広い範囲における双方のニーズに基づいた実践的研究が可能になってきた。

今回の実践が機縁となって、参加協力していただいた方々は、訪日さらには青森への訪問を希望し、予定して下さっている。そして、起業という点でいえば、セブの山間地で発見された自生有機“マナ”シナモンを日本と共同開発していくことが具体化されている。また、語学教育、大学院研究教育においてもイノベーティブな取り組みを進めていくことがセブ側から提案されており、我々のプロジェクトそのものが、地域経営を促進し高等教育や観光地域経営開発の領域で地域イノベーションを興していく様々なチャンスを、陰に陽に作り出してきたと考えている。ただ、「地域経営への実装」という点では、始まったばかりであり、ようやくスタートラインに立ったところである。我々の実践的研究を、地域創業や起業に応用し、地域経営実装の視点からグローバルに展開していくことが、次なる課題である。

地域連携センター　兼任研究員　遠藤　哲哉

伝統文化のアーカイブ化　～青森ねぶた祭を中心に～

本報告は 2023 年度地域連携センタープロジェクト、青森学術文化振興財団助成の「伝統文化のアーカイブ化　～青森ねぶた祭を中心に～」事業報告である。事業の主旨は次の通りである。まず、これまで比較祭礼調査を行ってきたが、それぞれの地域で調査を行う際に、資料などのデータ収集が困難な場所が多いことがわかった。青森の伝統文化についても同様なことがいえ、主に口承伝聞が多い。こういった現状から伝統の継承のため、すぐにでも体系的、集約的なデータのアーカイブ化が必要だと考えた。本事業は特に青森ねぶた祭の伝統を継承し後世に伝えるためのアーカイブ化を目的とするものである。

これの目的を達成するため、①祭礼のアーカイブ化の先進事例、②一般的な伝統文化の継承と保存方法の調査、③「青森ねぶた祭」のアーカイブ化に関する研究会を行った。①に関しては 2023 年 7 月に、京都の「祇園祭」の山鉾を管理している地域に調査を行った。特徴的であったのは、地域住民がいない場所でも、企業主体となって祭礼を守っていることであった。これは京都に住む人々の祭礼に対する想い、そしてシビック・プライドが根底にあることを感じさせるものであった。②に関しては 9 月に竹浪比呂央ねぶた研究所と共に、京都のミュージアムなどの調査を行った。芸術という観点から今後「ねぶた」をどのようにとらえていくか、継承していくかが非常に参考になった。例えば前年も取り上げたが京都芸術大学の取り組みや、ミュージアムの作品に対する愛情が特徴的であった。③については、研究会を定期的に行い、「何を、どのように保存するか」に関して意見を出し合った。当初は「聞き取り調査の結果」のみのアーカイブを考えていたが、写真という媒体が非常に重要だとの結論に達した。次年度以降継続的に研究会を開催し、実際の展示なども取り組んでいく予定である。

最後に本事業は過去のものを大切に保存するだけでなく、今後の地域社会への活用につながる事業であることを再認識した。すなわち青森市自体が「地域×アート」の先進地域となる可能性が示された。それは青森市が持つ文化資源が豊富にあり、そして多くの人から評価されていると感じたからである。本事業を発展させ、地域のみらいにつなげていきたい。

地域連携センター　兼任研究員　佐々木　てる

とうろうやま
蟷螂山

屏風祭　長江家

なぎなたほこ
長刀鉾

地域ねぶたの活用と地域活性化
～青森市の地域ねぶたの存続と市外地域への活用～

本事業は、新型コロナウイルス感染症の影響を受けた、青森市内の地域ねぶたの存続について、および「地域ねぶたのコンテンツ化」の市外の利用可能性について明らかにするために行われた。青森市内の地域ねぶたの存続に関しては、2023年12月に関係団体に関してアンケート調査を行った。結論として明確になったのは、「地域間の連携を強め、ねぶた本体のシェアに取り組む事で、経費削減につながる可能性がある」「新型コロナウイルスは地域ねぶたの参加者の減少に大きな影響を与えた」「地域のねぶた存続が地域活性化につながると考えている地域が多い」「将来的には自分たちの地域だけで、ねぶた本体の制作を進めることが困難だと考えている」「少子高齢化により次世代の育成が困難になっている」といったことであった。詳細に関しては別途作成した報告書を参照してほしい。

干支ねぶた「辰」

また「地域ねぶたのコンテンツ化」に関しては、すでに北海道教育大学岩見沢校の学生が中心になって、岩見沢ねぶたを実施していること、青森県三沢市にある「星野リゾート　青森屋」では、「ねぶた」の活用を特色ある宿泊施設につなげていること、そのほかの地域（例えば東通村）でもねぶたが地域の祭に活用できると考えていることなどが明らかになった。「青森ねぶた祭」というと、全国的には8月2日～7日の本祭のみ注目を集めるが、青森の「ねぶた」そのものが、文化芸術、地域活性化など、多くの事に有効活用できることがわかった。今後さらに調査をすすめていきたい。

「七福神」：星野リゾート　青森屋

東通村での調査

地域連携センター　兼任研究員
佐々木　てる

青森県内の中学校英語科における
ライティングパフォーマンス評価の実態調査に関する研究

本研究では、青森県内の中学校151校を対象に、ライティングパフォーマンス評価の実施状況についてグーグルフォームによる質問紙調査を行った。学校回収率は26.5%、回答した教員は60人で、実施率は93.3%であった。

アンケートの内容は、回数、ルーブリックの作成、評価者、技能統合型パフォーマンステストの割合、まとまりのある英作文の割合、まとまりのある英作文の重要度とその理由、フィードバック（FB）の方法、まとまりのある英作文の採点で設定する観点と配点、採点・添削・FBへの自信、困難点の合計11項目である。

分析の結果、実施率及び平均回数は全国同等レベルであることがわかったが、定期テストの中での実施が多く、適切なFBが行われているか懸念された。またルーブリックの作成率が低く、評価者も教科担任単独が最も多いため、評価の信頼性が懸念された。まとまりのある英作文はパフォーマンステスト全体の70%超を占め、伝える力や思考力、表現力の育成のために重要だと認識されていたが、評価の際に重要だとする観点では、内容が最も多く、その後文法や文構造、語彙、綴り等のローカルな観点が上位を占め、FBもローカルエラーに対する割合が高く、首尾一貫性や構成、論理性等のグローバルな観点は軽視されていることがわかった。さらに実施するための時間が設定できないというマネジメントに関する困難点も明らかになった。

これらの解決には、教員の指導力向上を図る演習型研修が有効であること、時間のマネジメントについてはデジタル機器の活用や個別最適な学びの推進による授業の効率化が必要であることを助言した。今後も研究を通じて教育現場に対しきめの細かいサポートをしていきたいと考えている。

地域連携センター　兼任研究員　丹藤　永也

学習者指向の遠隔英語授業の試行

外国語教育を取り巻く ICT 環境は過去 60 年間大きく変化してきた。外国語教育は蓄音機から CSCLL（Computer-Supported Collaborative Language Learning）まで、その時代の新しい技術を取り入れて来た歴史がある。近年では、インターネットを介した YouTube の利用や、海外・遠隔地との学生同士の交流、海外の講師によるオンライン講座など、ICT の進化に伴い、これまで伝統的な対面授業が一般的だった外国語学習のクラス環境も、さらなる進化を遂げつつある。更に 2020 年以降，この「遠隔」授業形態は急速に様々な場面に拡張されるようになった。本事業の目的は、約 50 名の大学生を対象に、1 学期間双方向ハイブリッド型（対面＋オンライン方式）遠隔英語授業を試行し、遠隔のみの授業との相違を検証することである。授業は週 1 回 15 週間行われた。4 週中 3 回を遠隔（同時双方向）、1 回を対面（一般的授業）とした。15 週終了後「令和 3 年度全国学生調査」を参考に作成したアンケート調査を実施し、その結果を検証した。ハイブリッド型授業では、一般的に、教員の社会的存在感が薄れがちな遠隔授業においても、対面と組み合わせることで、双方向的な学習が促進され、緊張感を保ちながら学習意欲を維持し易くなるという結果を得た。また、特に英語への苦手意識がある学生に関しては、プレッシャーが少なくストレスが少ない授業を体験できるという結果となった。

地域連携センター　兼任研究員　香取　真理

新型コロナウイルス（COVID-19）に関する県内各市町村と外国自治体との行政広報の国際比較

本事業の目的は青森県内各市町村の公式ウェブサイト上の新型コロナウイルス（COVID-19）関連メッセージを調査し、それを海外都市と比較対照することである。その知見から、県内在住者や一時滞在者に適切迅速に情報提供できる方法を考察する。

2023 年 5 月 8 日、COVID-19 が感染症法上、5 類感染症に変更された。感染規模の縮小も相まって、各市町村からの情報発信頻度は 2022 年と比較し減少した。海外でも、COVID-19 警戒レベルを常時表示したニュージーランド Hamilton City Council（https://hamilton.govt.nz/）や検査会場を定期的に提示したスコットランド Stirling Council（https://www.stirling.gov.uk/）の公式ウェブサイトから COVID-19 情報が発信されなくなった。これを背景に、「ポストコロナ時代の COVID-19 関連情報の発信」を第 12 回地域文化教育学会全国大会（2023 年 11 月 11 日、リモート開催）で発表した。現在、その報告論文を投稿中である。令和 6 年能登半島地震以降、避難所での感染症拡大に注目が集まる。防災産業展 2024（2024 年 2 月 20-22 日、東京ビッグサイト）では、清潔環境を保つ様々な仮設トイレを見学した。また通時的な感染症対策とその周知法を学ぶため、北里柴三郎記念博物館、健康と医学の博物館を見学した。前者では北里が感染症予防や積極的な治療を目指す姿勢と予防を絵で大衆に周知する点を、後者では帝国大学医学部が組織として感染症と対峙する姿を学んだ。脚気病室を臨時避病院に変更する旨の資料等を閲覧でき有意義であった。この新旧情報を活かし、今後は COVID-19 情報開示の政策評価をいかに測定するか課題としたい。

地域連携センター　兼任研究員　江連　敏和

公開講座
（公益財団法人青森学術文化振興財団助成事業）

大学院公開セミナー

地域は、現在、多様かつ複雑な課題を抱えており、その解決に向けては、複数の視点・視座（perspectives）からの柔軟なアプローチが必要です。本学大学院の科目担当者が、日々、取り組んでいる研究活動は、この多様・柔軟なアプローチの一環をなしています。

本セミナーでは、そのような各講師の研究活動を紹介し、地域社会への「知」の還元を目的として開催しています。

全４回のセミナーは､6 月～７月にアウガ５階青森市男女共同参画プラザ｢カダール」研修室で開催され、受講者数は延べ 51 名でした。

・第１回「グローバル経済下の地方経済活性化」（河野秀孝教授）
・第２回「都市の読み方と諸問題」（足達健夫准教授）
・第３回「現代組織論の一動向：Capitalism の変容と企業組織を巡って」（藤井一弘研究科長・教授）
・第４回「法人所得課税における新たな課税ベースの提言」（金子輝雄教授）

第１回　河野秀孝教授

外国語講座

本講座は､一般的には高等教育機関での講義となる「ことばと文化」「英文学」などのテーマに関して地域の方々の教養を深めること、TOEIC 講座や英語プレゼンテーション講座を通して，青森県民の潜在的な英語力向上にもつながることを目的として開催したものです。また、講座終了後、受講者がこれまで以上に積極的に外国人と交流し、青森県の更なる国際化に寄与することを期待しています。

本講座では、５つのコースを開設し、９月～ 12 月に青森公立大学地域連携センターで開催され、受講者数は延べ 31 名でした。

ことばと文化　香取真理教授

・TOEIC 入門～ 500 点コース～　全４回（丹藤永也教授）
・英文学入門～『フランケンシュタイン』の世界　全４回（成田芙美講師）
・英語プレゼンテーション入門　全４回（エシアナ・ベネス講師）
・ビジネス英語入門　全４回（江連敏和准教授）
・ことばと文化　全１回（香取真理教授）

浅虫てつがく対話

子どもから大人まで参加できる哲学対話のワークショップを浅虫で開催することにより、解き難い問いをじっくりと考えることができる対話の場を地域に形成する可能性を探る講座を実施しました。他者と出会い、言葉を交わし、子どもと大人がともに考える哲学対話の実践を行いました。

夏の部、秋冬の部ともに道の駅「浅虫温泉　ゆ～さ浅虫」4階会議室で開催され、受講者数は延べ45名でした。

・夏の部（大森史博准教授）
・秋の部（大森史博准教授、ゲストスピーカー：加藤寛（あおもり創生パートナーズ））
・冬の部（大森史博准教授、ゲストスピーカー：棟方香吏（童話作家））

夏の部　対話実践風景

ねぶた学

本年度の公開講座はねぶた師の伝統継承を考えることです。2022年、第5代名人千葉作龍先生が現役引退を告げました。しかしその作風やねぶたに対する精神は多くの人に引き継がれています。今回は特に、現役で活躍する千葉先生の系譜につらなる、ねぶた師の方々にご講演頂き、その技術や精神の伝承について語ってもらいました。

全6回の講座は、第1回～第5回は10月～11月にアウガ5階青森市男女共同参画プラザ「カダール」AV多機能ホール、第6回は12月に調査報告会を新町キューブグランパレで開催し、受講者数は延べ218名でした。

・第1回　特別基調講演
　「ねぶた制作と流派～千葉作龍の作品を考える～」
　阿南透（江戸川大学教授）
・第2回　吉町勇樹（ねぶた師）
・第3回　林広海（ねぶた師）
・第4回　立田龍宝（ねぶた師）
・第5回　内山龍星（ねぶた師）
・第6回　研究報告会「伝統文化のアーカイブ化を考える」
　司会　今泉清保（ATVアナウンサー）
　講演　竹浪比呂央（ねぶた師【第7代ねぶた名人】）
　研究報告　佐々木てる教授、佐々木ゼミ学生

第6回　調査報告会

創業・起業セミナー

2023年6～7月、創業・起業に関心のある学生を対象として、連携協力協定を締結する公益財団法人21あおもり産業総合支援センターから講師を招いて創業・起業セミナーを行いました（全4回）。

講師は、シニアー・インキュベーション・マネジャーの鎌田直人氏。「創業をめぐる環境について」や「事業計画作成シミュレーション」などについて指導いただきました。

また、昨年に続いて第1回はゲスト講師として一般社団法人tsumugu代表理事の小寺将太氏を招き、事例紹介としてご自身の起業体験をお話しいただきました。

参加者の中には起業に興味を抱く学生が多く、同じ志を抱いた仲間と意見を交わす姿が印象的でした。

講師　鎌田直人氏

青森市学生ビジネスアイデアコンテスト

2023年12月3日（日）、青森商工会議所会館にて「令和5年度青森市学生ビジネスアイデアコンテスト」が開催されました。

今年度の本学代表は、柳沼諒さん（経営学科3年）、佐々木拓さん（経済学科3年）、鈴木脩平さん（経営学科1年）、林拓海さん（経済学科1年）の4名で構成された「カシスアップル広め隊」です。

青森の特産品であるカシスとリンゴを組み合わせた「青森カシスアップルのカクテル缶」の販売を提案しました。日本酒以外の青森の「新地酒」を開発し、カクテル缶として新しい青森のご当地アイテムを展開するビジネスプランを発表しました。

審査員の方々による厳正な審査の結果、昨年の本学代表に続き、見事第2位を受賞しました。

プレゼンの様子

受賞おめでとうございます！

青森公立大学地域連携センター

大学キャンパス（事務室、スタートアップラボ）
〒030-0196 青森市合子沢字山崎153-4
電話：017-764-1589　Fax：017-764-1593　E-mail：renkei@b.nebuta.ac.jp
開室日　月曜～金曜　開室時間 8:30～17:00
閉室日　土曜・日曜、祝日

まちなかラボ（メディアラボ）
〒030-0801 青森市新町1-3-7 アウガ6階
電話：017-718-7025　Fax：017-776-2082
開室日　月曜・火曜・木曜～土曜　開室時間 13:00～20:00
閉室日　水曜・日曜、祝日

編集・発行 青森公立大学 地域連携センター 2024年3月発行 ISSN 1882-4218